神奈川県現代俳句協会会報

第166号
令和6年12月発行

令和六年俳句大会報告

荻野　樹美　記

令和六年十一月二十三日
於：かながわ県民センターホール
晴天なれど小寒い勤労感謝の日
参加者数八十六名

恒例の一句会の席題は「凩（木枯）・坂」

大会はなつはづき氏の司会で始まり、開会の言葉は副会長の大本尚氏、挨拶は、大会実行委員長の佐々木重満氏、新会長の芳賀陽子氏からありました。

会場風景（写真撮影：石川夏山・藤田裕哉）

ご来賓の千葉県現代俳句協会会長の並木邑人氏、東京都区現代俳句協会副会長の中内火星氏、東京多摩地区現代俳句協会副幹事長の小山健介氏、横浜俳話会会長の川島由美子氏、神奈川県俳句連盟副会長の桑野コワシ氏からご挨拶がありました。

今大会は、式次第の変更がなされ大会作品成績発表が尾澤慧璃氏からありました。

募集句の表彰は芳賀陽子会長、募集句の講評は、監査役麻生明氏、尾崎竹詩名誉会長、芳賀陽子会長からありました。

募集句表彰
芳賀陽子会長
川崎果連氏

続いて、講演者の松下カロ先生の紹介が芳賀陽子会長からありました。松下カロ先生は、「象を見にゆく言語としての津沢マサ子論」にて第三十二回現代俳句評論賞を受賞されており、『白鳥句集』ほかのご著書があります。今大会では「マイノリティとしてのことば」と題するお話をいただきました。講演録は、次号の会報で特集いたします。

休憩を挟んで当日一句会が開催されました。

司会は引き続きなつはづき氏。披講は鹿又英一氏、菅沼とき子氏、杉美春氏が担当されました。集計時間中に佐藤久事務局長より新会員の紹介がありました。

当日句の講評は、ご来賓の方々、松下カロ氏、顧問の川村智香子氏、副会長の平田薫氏からありました。

当日句会の成績発表は伊藤眠氏が行いました。

最後に内藤ちよみ副会長が閉会の言葉を述べ、大会は無事終了しました。

その後、懇親会会場へ移り、山下遊児氏、杉美春氏の軽妙な司会により、参加された皆様は楽しい時間を過ごされて、懇親会も盛会裏に終了いたしました。

上：松下カロ先生
下：懇親会

入賞作品　（事前投句の部）

神奈川県現代俳句協会賞

星月夜数字になった兵士たち　　川崎　果連

トピックス

俳句大会報告
諸家近詠
会員新刊案内
サミット短信
冬の一句
新連載：
吟行しようよ！
丹沢句会吟行記
全句講評講座報告

神奈川県知事賞

八月のどこを切っても不整脈　長谷川昭放

神奈川県議会議長賞

大夕立空缶けっただけなのに　関戸　信治

神奈川県教育委員会教育長賞

痒いところはないですか墓洗う　尾崎　竹詩

ｔｖｋ賞

姿なき人に空けおく月の椅子　関根　洋子

横浜俳話会賞

ベランダにくつ下ほどの鯉のぼり　沼宮内　薫

神奈川県俳句連盟賞

虫の夜や声を聞きたくなる手紙　大澤　秀子

大夕焼今が戦前かも知れぬ　※尾崎　竹詩

風薫る子の全力を父が受け　※関戸　信治

入賞

空ばかりあって寂しい柿を挽ぐ　なつはづき

稲刈って一村の色変りけり　中村　昌男

相談に乗つてやれない猫の恋　山下　遊児

母の日や一番小さき母の靴　※大澤　秀子

終戦日母の背にある黙秘権　※関戸　信治

十月のふっと誰かに入れ替わる　渡辺　テル

無言館辞す八月の空青し　岸　健

あぶな絵の隅に百年紙魚でいる　かわにし雄策

気掛りな夏の地球の骨密度　平山　圭子

蟬しぐれ頭の中が森である　町野　敦子

七夕や老いて逢いたき人のあり　赤坂田家子

臓器みな八十路受け入れ冷やっこ　式部　洋子

昼寝覚少し私が新しい　三沢　容一

売店のぬるき炭酸沖縄忌　麻生　明

人住んで家らしくなる吊し柿　※町野　敦子

冬日和ゴリラが見せている背中　※麻生　明

パスワード不要ポンポンダリア咲く　※なつはづき

木守柿落ちてあたりが暗くなる　池田　忠山

万緑や輪ゴムのやうな鯉の口　田中　幸子

父の物着て父よりやさし案山子かな　田畑ヒロ子

被爆樹は永久の語り部広島忌　清水　呑舟

人間も素数のひとつ星涼し　中山　妙子

台風一過顔を洗つたやうな月　栗林　浩

黄砂降る裏も表もなき地球　栗林さと子

八月や水の地球は火の色に　山澤　和子

雑音だらけのラジオから黒揚羽　中内　火星

黒ぶどうゆっくり答出すつもり　川島由美子

流木の芯まで乾く神無月　※川崎　果連

敵味方なき青空へ柿を干す　※関戸　信治

風船にふっと浮力という重さ　※なつはづき

さんすうでつまずきどんぐりを拾う　吉田　典子

当日一句句会　報告　**伊藤　眠**

来賓作品

凩や親父のカレー食べたくなる　並木　邑人

小蕪コロがる世界情勢坂下る　中内　火星

凩や更地となりし駅へ坂　小山　健介

黄葉の明るさへ坂道上がる　川島由美子

海坂の七曲やも冬茜　桑野コワシ

凩の匂ひひとつを残したる　松下　カロ

入賞作品

神奈川県現代俳句協会賞

木枯や戻るところのない遺骨　加那屋こあ

横浜市長賞

凩や子ども吐き出す滑り台　式部　洋子

横浜市議会議長賞

凩の細切れにする汽笛かな　江尻　久子

横浜市教育委員会賞

冬雲は鮫の形よ九段坂　長島喜代子

ｔｖｋ賞

本音吐くほどに凩強くなる　山戸　則江

一人一句

木枯に最後の言葉奪はれて　柏柳　明子

凩の貌を見ている坂の道　町野　敦子

木枯や母は一日さがしもの　加賀田せん翠

木枯しや母の骨壺また火照る　尾崎　竹詩

真ん中を空ける寄せ書木枯来　芳賀　陽子

この坂を登れば明日冬満月　伊藤　梢

坂登り下る勤労感謝の日　なつはづき

木枯の親子兄弟総出かな　國分　三德

木枯と駆け降りてゆく神楽坂　杉　美春

リュックから凩出して靴替へて　栗林　浩

時雨れては足なほ重し遅刻坂　伊藤　眠

凩や朝目覚めたらガラパゴス　安藤久美子

木枯しに触れると舌を噛みそうだ　かわにし雄策

凩やひとりで前を向いてゆく　山田ひかる

凩や数多の訃報運び来る　佐々木光野

世界混迷まずは木枯やり過ごす　加藤かほる

急坂を下る団栗民主主義　川崎　果連

凩や笑ひころげて下校生　栗林さと子

あの坂の向かうは戦冬薔薇　伊藤　正規

時の坂転がるようにはや傘寿　三上　泉

木枯を通せんぼしたいＡＩ　金栗トモ子

山茶花やひかりこぼるる坂の上　星　由江

黄泉坂はまだ先のことシクラメン　北村　文江

木枯しに泰然軒の有平棒　吉村　元明

凩や惚けてしまえば少し楽　関戸　信治

木枯や川沿いに行くランドセル　瀬崎　良介

凩に吹かるるうしろ姿かな　鹿又　英一

木枯一号夜も輝く神獣鏡　内藤ちよみ

沈黙の落ち葉ケラケラ坂くだる　川村智香子

木枯し一号ゆるむ関節二、三本　大西　惠

北斉館出で凩の吹き荒ぶ　保田　佳子

木枯や炎の包む鍋の底　原田もと子

凩や総菜パンをふたつみつ　中山　妙子

木枯や上り切つたる坂の上　比留間加代

低周波治療の無音木枯へ　麻生　明

破れ目に貼るセロテープ木枯来　植田いく子

韋太天の駆ける音して凩来る　菅沼とき子

どの髪も凩まとひ乙女坂　尾澤　慧璃
冬薔薇の棘あらはなり雨の坂　堀口みゆき
白杖の人の手をとる寒の坂　渡辺　和弘
凩や顔と名前が食い違い　里見　美季
凩や又三郎が笛を吹く　関根　洋子
古枯や噂話を吹き飛ばし　多久島重宏
凩やただいまの声より迅し　沼宮内　薫
木枯やよもつひらさかころころと　山下　遊児
前傾姿勢で坂駆け上がれ冬青空　伊藤キララ
凩や波の間に間に浮く鷗　廣崎　龍哉
坂いつも枯葉を踏んでしまいけり　平田　薫
凩や初めましてと肌荒らす　田畑ヒロ子
坂の上黄菊白菊母は亡し　野木　桃花
凩や友人とゆく競艇場　三沢　容一
木枯しに聴く父母の生き様を　岩田　信
坂道の果ての戸建や石蕗の花　藤田　裕哉
凩やまさかのさかは急な坂　長谷川昭放
木枯に背を押され赤提灯　大本　尚
凩や唇噛めば血の滲み　菅原　若水
凩が古き宿場を通りゆく　佐々木重満
凩や身を縮めてラーメン屋　近藤由美子
木枯や斯くもやせゆく並木道　八木　和子
凩の音が聞こえし宅急便　岡田　恵子
木枯や西欧の坂の上の雲　村上　裕也
木枯も胸張ってゆく老いの坂　荻野　樹美
ガラス張りの高層ビルや凩吹く　宮永　武彦
凩や跡地の児らのヒーローショー　阿部けん笑
木枯らしが本屋の棚を通り過ぐ　朧　潤
木枯や降りゆく人の有り難う　薄　よし子
凩やぶつかりながら一歩づつ　吉田半夏生
凩の坂を上って図書館へ　石川　夏山
やわらかな木枯となるべく人の死は　渡辺　テル
白杖の凩の坂辿りけり　佐藤　久
しぐれ坂轢死の狸眼で悼み　若林つる子
坂行けば紅葉のグラデーション　田中　悦子

諸家近詠（到着順）

季の声　加藤　三眠（無所属）

約束はきちんと守る彼岸花
中庭に先ず一木の初紅葉
秋入日烏の群舞富士の影
富士守る外輪山や冬の月

何処　荻野　樹美（葦樹・山河・つぐみ）

白鷺の嘴よりこぼる秋の水
目の合って横向く鴉秋暑し
坊守の声に振り向く花芒
爽籟や鴉と話す人何処

季移る（トキ）　尾崎　竹詩（無所属）

まだ咲かぬ桜の予約して帰る
囀りや農夫寡黙で早起きで
すでにもう農夫の顔して案山子佇つ
気ヲ付ケ！向日葵全員帰還セズ

ハンモック　小野　裕三（海原・豆の木）

早春の君に蹄のようなもの
棘あるものみな置いてきて雛遊び
来世も逢う人さよならクレマチス
親友になれるなれないハンモック

秋冬　小沢　一郎（ロマネコンティ）

小夜時雨心の窓を閉めました
一本の樹木は詩なり銀杏散る
月冴ゆる私の心銀メッキ
凍蝶よこの指とまれ命いま

風は鈍色　長田美恵子（顔）

弟子もまた無口な庭師秋の風
秋暑し論客ぞろり居並びぬ
やうやうと腰をあげたり蛇穴に
敗荷や風は鈍色日は斜め

式部の実　加賀田せん翠（無所属）

凌霄花咲ききっている不安
香水が降りて呼吸を戻しけり
それぞれに言い分あれどとろろ汁
晴れ渡り空家めく日や式部の実

文化の日　金栗トモ子（ロマネコンティ）

淋しさは真ん中にあり実石榴
石榴が口を割る真実を告白す
母の断十年越えて花野行く
野垂れ死にの言葉の数多文化の日

山の畑　奥村　純子（暖響）

捨て畑を守り続ける山桜
空も青浅間も碧や豆植うる
残照光芒秋耕の手を止めて
一筋の煙昇りて山眠る

秋の山　加藤かほる（顔）

山猫の馬車があちこち秋の山
柿紅葉地面を少し重くして
挑戦状突き付けてゆく鵙高音
一人言無意識に増え秋深む

ロルカ　柏柳　明子（炎環・豆の木）

リハーサル群舞に混じる雪女
虎落笛太古の闇を私す
スタジオの鏡捲れば冬銀河
足音の冴えてロルカは血の匂ひ

草花　　勝　　烏（無所属）

彼岸花咲いた証に似つかぬ葉
侘助の機を失ひて傷心中
冬至来てふしだら朱きアロエ花
虫喰ひのもみじ葉模様闇灯り

雀　　金子　堯子（麦）

雀すずめ絶滅の危機冬ざるる
石灰岩崖の草々枯れ急ぐ
冬の蜘蛛車道を遅々と這い渡る
舌切られし雀も癒えて枯芝に

さくら　　金井　暎子（無所属）

火の川は地図になき川曼珠沙華
蛇衣の袈裟を南無の石仏
恍惚や雨に崩るる白ぼたん
さくらさくら旅は終わらぬ九十路（ここのそじ）

新会員紹介欄

秋惜む　　三橋　伸子（無所属）

冬紅葉ゴジラ観てみる一人の夜
小春日や母のかんしゃく宥める夜
土蔵から出す塗し屋さん文化の日

神話　　蓮田　宿仮（無所属）

ハロウィン天使も化ける夜の顔
鼓星乾坤一擲打音連打
イカロスは空っ風あい墜落す

会員新刊案内

栗林浩句集　『あまねし』（角川書店）　　**佐藤　久　記**

「あまねし」（二〇二四年八月）は栗林さんの第三句集。第二句集「ＳＭＡＬＬ　ＩＳＵＥ」から僅か二年あまりでの上梓。そのこと自体が驚きだが、前作に勝るとも劣らぬ秀句の数々に感銘を受けた。装丁も美しく洒落ている。読み応えのある句集だ。

あとがきに『通底するテーマは「日常の生活と旅、そして命」といったものに目を向けて「あまねく」詠んだつもり』とある。好きな句は数多いが、このテーマに即して何句か紹介させて頂こう。

日常の生活と旅
下り線の屋根なきホーム啄木忌
永き日の手帳に二本しをり紐
リラの花モナリザだけに逢ひにゆく
狙撃手のゐさうな麦の秋の中
射干の上に雨傘干してある
喪のタイ外し王寺駅前冷やし酒
苦艾酒（アブサン）や霧のオスロはうすみどり
「あとかくしの雪」てふ雪の散居村

そして命
金縷梅やいのちが喉を出たさうに
沖縄忌ハシビロコウのうす瞼
泣き過ぎし順に仰向く秋の蟬
凍星を結ぶやいのち光り出す

どの句にも作者の息遣いが感じられ、景が生き生きと動き出すようだ。そして全てに優しい眼差しを感じる。巻頭句「この慈光あまねかるべし初山河」は作者自身の姿でもあるのでしょう。

栗林さんは俳句誌への執筆や講演などでも多忙にされており、その造詣の深さと情熱に感服するばかり。今後益々のご活躍を楽しみにしています。

鶴田静枝句集『花林檎』
（喜怒哀楽書房令和六年九月二十四日発行）　　**内藤ちよみ　記**

鶴田様は酒井弘司主宰「朱夏」のあしたば句会のリーダーとして活躍。『花林檎』は、著者の第二句集です。令和二年の第一句集『心の窓』から後、四年間の作品三百十四句収録されています。

見てねには見たよと返す花林檎
花嫁のヴェールの向う深雪晴
おさな児の指に巻きつく春の雲

「見てねには見たよと返す」この表現は、見たものを心で捉え、身体感覚で詩形に整えています。淡く薄紅色に咲く花林檎の季語も揺るぎません。この作風が、作者独特の個性となっています。

句集名『花林檎』のこの句は、青森県在住の娘さんとの言葉のやり取りなのでしょうか、林檎の花が「見てね」と、作者に囁いている句とも受け取れます。想像するのも楽しいですね。第一句集から四年間、研鑽された力量を感じます。

母を恋ふ修司の百句秋つばめ
蜻蛉らの洗礼白神登山口
花明りざわめき止まぬいのちかな

どの句からも俳句の「深さ」と「新しさ」を目指す姿勢が伺えます。その中から、「秋つばめ」により、柔らかい詩情が醸し出されています。「洗礼」の比喩の使い方が巧み。「花明り」は、心の内面をざわめく命と表現されていて佳句。

今生は雨のち晴れときどき虹
春疾風片目の猫の名はロマン
八十億の願ひをのせて星祭
反戦歌ルピナス天をつらぬけり

片目の猫を「名はロマン」と、した事で詩情へと昇華しています。豊かな個性に共感します。

サミット短信

辻堂句会

伊藤　梢　報

於・明治市民センター

第三一二回　令和6年9月28日

生きぬけよ地震のあとに秋出水　岩田　信
満月にさし出す指やドビュッシー　生田　暁美
久闊を叙して虫を聴く墓参かな　石鎚　優
星月夜産声ひびき娘は母に　占部美土子
新走り四人かしまし誕生会　奥村　純子
秋空に素数で詩う宇宙論　樫村　弘子
花野よりなお行き行きて浄土かな　金栗トモ子
葛の蔓伸びゆくところ無重力　佐々木重満
夕映えを焦がしてゆけり椋百羽　土岐　詳恵
生きのびて色なき風の唄を聴く　長島喜代子
秋の風路傍の草を撫でてゆき　中村まさえ
草の花邪魔にならぬとあるがまま　野口美穂子
石叩只今地球問診中　長谷川昭放
長袖のブラウス選ぶ今朝の秋　平山　圭子
忘るるは明日への力天高し　星　由江
ほろ酔ひて風の道ゆく十三夜　柳　蒼柳
たっぷりの茗荷の香り皆不在　吉田　典子
望郷（ペペル・モコ）空ノ彼方ヲ　破レ蝶　りょう
かなかなかな一緒に泣いてどうなるの　若林つる子
蠼蛄鳴くやあの世で鳴いてる気がするよ　渡辺　正剛
耳鳴りか虫の音なのか闇動く　伊藤　梢

第三一三回　令和6年10月26日

ぶらさがる子・孫・ひ孫柿たわわ　岩田　信
夫の手は節くれ籠の秋茄子　占部美土子
曼殊沙華葉山にもある千枚田　大本　尚
秋夕焼手を振りながら消えていく　樫村　弘子
やっと来た小さな秋は後退り　金栗トモ子
十月桜　満開なれど足りぬ空　佐々木重満
海荒れる頃石蕗の花咲き初（そ）むる　田畑ヒロ子
モビールのかもめやかもめ空高し　土岐　詳恵
細々と生きてころころ零余子飯　長島喜代子
所在無く一人バス待つ暮の秋　野口美穂子
最期まで此の地と決め雁渡る　平山　圭子
縄のれん女将の酌の温め酒　廣田　洋一
母恋へば晩秋の風さはさはと　星　由江
生き延びてほっとひといき新酒酌む　柳　蒼柳
髪切って桜紅葉に急かされる　吉田　典子
遊子タリ　推古へ還ル冬ノ蝶　りょう
塞翁ヶ馬子と孫が来る秋日和　若林つる子
実南天一途に信じ愚痴はなし　渡辺　正剛
曇天の端をめくれば秋青空　伊藤　梢

◎連絡先…事務局佐藤久まで

みなとみらい句会

菅原　若水　報

於　横浜市社会福祉センター

第四一五回　令和6年9月15日

輝きし過去は語らずおけら鳴く　金栗トモ子
秋暑し体内時計停止中　小林　基子
稲架掛けて土手を二つに仕切りたる　里見　美季
風まかせ流れまかせや柳散る　菅原　若水
あるがままを見守っている蕎麦の花　長島喜代子
古茶新茶午後の二人の句読点　藤方さくら
秋の声見たくて裏の戸を開ける　町野　敦子
頬杖を崩す一閃日かみなり　若林つる子

第四一六回　令和6年10月15日

空港の不発弾爆ず蚯蚓鳴く　金栗トモ子
ぽん菓子の轟ひてゐる秋高し　近藤由美子
銀杏はジュエル卑弥呼の首飾り　里見　美季
くじ引きはいつもハズレや天高し　菅原　若水
ごろごろと冬瓜でいる忌引なり　芳賀　陽子
秋の蝶身の引き方を考え中　長島喜代子
風邪を引く缶を切るおと枕元　蓮田　隆秀
老体に大波小波曼殊沙華　藤方さくら
公園の椅子の秋思が感染す　細貝　昭吾
ジーパンが乾き塩辛とんぼ来る　三沢　容一

第四一七回　令和6年11月14日

身に入みし健さん映画昭和かな　金栗トモ子
わけもなく屈託のあり冬満月　小林　基子
山茶花や文箱はみ出す言の葉の　里見　美季
季語からの招待状を待つ寒夜　菅原　若水
鬼の子や後の正面だーれ　関根　洋子
唐招提寺心眼で見る紅葉　芳賀　陽子
気を入れて鍋釜磨く神無月　長島喜代子
縦書きのミミズ這ふ文字枯野かな　蓮田　隆秀
脱ぎ捨てる重ね着フックだアッパーだ　町野　敦子
招かざる議員の来たる芋煮会　三沢　容一
秋憂ひマイナカードの要不要　吉村　元明
冬銀河飽食の民飢餓の民　若林つる子

◎連絡先　菅原若水　s-shinya@s6.dion.ne.jp
までご一報ください。折り返し「句会へのお誘い」をお送りいたします。

星川句会

金栗トモ子　報

九月　令和6年9月2日

割下にうるさき漢夏の果　麻生　明
新盆の母屋の明り遅くまで　大塚　真紀
日の盛り棟梁の声荒々し　桐山　芽ぐ
一人居の勝手に作るきのこ飯　栗原嘉一郎
混声のソプラノ突き抜ける秋天　里見　美季
どこまでも追いかけてくる愁思あり　菅原　若水
割り切れぬこともありけり草紅葉　藤原真理子
雷鳴の割り込んで来るひとりの夜　長島喜代子
店長の一声鰯のつかみ取り　町野　敦子
冷まじや箪笥の奥の離縁状　金栗トモ子

十月　令和6年10月7日

人生のリュック下ろして花野風　大塚　真紀
笑み給へ埴輪の人よねこじゃらし　石鎚　優

背の丸き癖を正せり菊人形　桐山　芽ぐ
友のふるさとより新米の十五キロ　栗原嘉一郎
白曼珠沙華世の境目は色待たず　里見　美季
美と醜は裏と表よ文化の日　菅原　若水
生来の人まかせなり甘藷蒸す　藤原真理子
生き方を問われ思案の残る虫　長島喜代子
水葬となる車の数多秋出水　金栗トモ子

十一月　令和6年11月4日

前衛に抗うリズム秋時雨　麻生　明
晩年の足音がする秋日和　大塚　真紀
もうひとり子を産むつもり酔芙蓉　石鎚　優
目の前を素通りしない葦の絮　桐山　芽ぐ
秋茄子を味噌いためして寝酒かな　栗原嘉一郎
起き抜けの首からほぐす秋の雨　里見　美季
文化の日眼の開かれる言葉あり　菅原　若水
菊香る選挙立会人若し　藤原真理子
胸に手をかすかな記憶ある晩秋　長島喜代子
放尿で火を消す小僧秋夕焼　町野　敦子
脱毛と増毛と紅葉且つ散る　金栗トモ子

◎毎月第一月曜日　星川駅下車「かるがも」または「アワーズ」で開催。
◎連絡先…事務局佐藤久まで

丹沢句会　竹村　半掃　報

順不同・秦野市西公民館

九月

コスモスの仲間に入りて今日一日　加藤かほる
暑さ負け天地玄黄筆乾く　杉本　秦空
野分け雲不等式から解けをり　竹村　半掃
次々とストーリー生む秋の雲　立石　采佳
絡め取る魔女の館か烏瓜　北村　文江
感情を寝かせておけば水の澄む　田畑ヒロ子
縄文の陰のあけすけ秋うらら　岡本　保
夏草や刈り抜かれなお執着　羽田　勝二
菅笠の交通巡査秋日和　澁谷　徹
恐竜館ぐるっと囲む残る虫　尾崎　竹詩
ここらあたり〇！乱心ノ マンジュシャゲ　興　起
水無月の何も持たずに花火かな　いけ　まり
一面に雲の虫干し空狭し　加藤　三眠
いわし雲空いちまいを使いきり　篠崎　妙子
蟋蟀の喰はれ残りにある洒脱　菅沼とき子
断崖に寄る海猫や秋の湖　三橋　伸子
ビルの谷抜けて大きな赤い月　飯田美枝子
庭たたき疑うように石たたく　長谷川昭放
案山子にもそろそろ準備鉄兜　佐々木重満

十一月

丹沢がゆっくり急ぐ冬支度　尾崎　竹詩
障子貼り閉めてきのうに別れたり　田畑ヒロ子
狼も兜太もすでに絶滅す　岡本　保
冬の靄自転車なみで自家用車　立石　采佳
マンモスの滅びし地球冬銀河　澁谷　徹
冬霧や正体不明のマスメディア　佐々木重満
日を遂ひて移りゆく色庭もみじ　加藤　三眠
着ぶくれてどうでも良きや人の事　菅沼とき子
子育ての苦を聴いている神無月　飯田美枝子
ゆれているついの一葉ダリらしや　興　起
秋惜むゴジラ観る夜の一人かな　三橋　伸子
月夜茸口を開ければ毒づきぬ　芳賀　陽子
平凡か非凡か松茸飯の存在感　竹村　半掃
世界混迷ひと粒残る実千両　加藤かほる
はらいっぱいむしくってゆけあきつばめ　羽田　勝二
冬蝶の夢の遺えぬ大伽藍　長谷川昭放

◎連絡先…長谷川昭放
080・5013・6618
Kumonomine100ku@mk.scn-net.ne.jp

川崎句会　山田ひかる　報

於・川崎市総合自治会館　9月21日（土）

九月

風鈴やよくも悪くも生き抜いて　麻生　明
秋風や指折り体操ままならぬ　安藤　均
玻璃越しに見る地ビールの出来るまで　植田いく子
古き紅絹裂きて織り込む九月尽　甲斐　泰子
名月や好きなことだけして生きる　加賀田せん翠
新松子転がる先にある希望　斎藤佳代子
富士眺めコスモス揺れる無人駅　佐伯　悦子
撮り鉄の少年走る秋日和　佐藤　鈴代
打って走って野球男の天高し　佐藤　廣枝
病み上がり太鼓が響く秋祭り　白井千代子
秋風に黄泉への便り託しけり　菅原　若水
新涼や熱の子の窓少し開け　関戸　信治
天上へ秋吹き上げるトロンボーン　ダイゴ鉄哉
御転婆のままに古希なり秋めける　花澤ちいこ
糸とんぼかくもやさしく世にありぬ　三沢　容一
ゆれてこそコスモス畑風を待つ　吉居　珪子
「折々のことば」を糧に貼る障子　山田ひかる

十月　10月19日（土）

柚子の実のまず触感を伝えけり　麻生　明
天高く私の声が届く朝　安藤　均
言うことのひとつは忘れ十三夜　加賀田せん翠
「生まれる」は受動態なり万年青の実　斎藤佳代子
スキップが好きコスモスの私語の波　佐藤　廣枝
チリチリと幼児を照らす秋花火　白井千代子
私の血サラサラにする鰯雲　菅原　若水
野菊挿し部屋にかすかに日の匂い　関戸　信治
この姿君と揃いの秋浴衣　ダイゴ鉄哉
こぼれ萩みやげにつけて猫帰る　花澤ちいこ
蟷螂の飛翔女人を驚かす　三沢　容一
文字のなき時計を腕に暮れ早し　吉居　珪子
十月の朝顔後期高齢者　山田ひかる

十一月

年の瀬や二重線引く住所録　青島　哲夫
今朝の冬パン屋の列にもと不良　麻生　明
栗ごはん乳児の腕もふつくらと　安藤　均
両腕の置きどころなく黄落期　植田いく子
樹間よりこぼれる朝日冬木影　甲斐　泰子
走り蕎麦母はいつでも腕まくり　加賀田せん翠
腕力も知力もなくて日向ぼこ　川島由美子
重ね着を脱いで始まる腕相撲　佐藤　廣枝
熱燗や幹事ほろ酔い同窓会　佐伯　悦子
境内で琵琶の音に酔う星月夜　白井千代子
寒き夜はだしのゲンよ永遠に　菅原　若水
北側は賞より漏れし菊ばかり　関戸　信治
恋流すイムジン河に冬きたる　ダイゴ鉄哉
おでん屋のおかみの腕に輪ゴム跡　花澤ちいこ
黄落期目から鱗の話聞く　三沢　容一
竹籠に馴染む指先文化の日　山田ひかる

◎連絡先…事務局佐藤久まで

湘南サンシャイン句会　堀口みゆき　報

藤沢市市民活動推進センター二階会議室

第１０３回　９月６日（金）

地球裏の戦火の匂ふ蝉の穴　青木　敏行
蔵出しの水より軽き新酒汲む　青柳　白芳
鎌倉の岩の奥まで葛の花　安藤久美子
沖に出てまた星を生む秋の海　安藤　靖
晴天に青紫の竜胆よ　大山　賢太
朝顔の花を数える朝の作務　荻野　樹美
合掌とくゆるやかに竹皮を脱ぐ　金栗トモ子
夏の果鞄の底に砂のあり　近藤由美子
女来るてふてふとんぼうちりばめて　塵
秋高し木端に刻む円空仏　芳賀　陽子
水曜日の文字は空色秋の海　日置　正次
新涼や湯上がりの肌透けていく　保里よし枝
とびの輪のだんだん高く新松子　馬来まち子
托鉢の足袋の白さよ秋の風　山口　愛子
空き瓶をコンと叩けば秋めきぬ　山下　遊児
酔芙蓉大人の色になりにけり　吉田　和男
蟷螂や雨粒のこる木のベンチ　堀口みゆき

第１０４回　10月４日（金）

巫女挿頭（かざ）す花の光や律の風　青木　敏行
十五夜の一筆足らぬ丸みかな　青柳　白芳
櫟の実保母を園児が励まして　安藤久美子
被災地の瓦礫にそよぐ萩芒　安藤　靖
にこにこと今が幸せ敬老日　荻野　樹美
捨て案山子なお十字架を背負いおり　金栗トモ子
深紅色（スカーレット）ト呼バレ　今生　秋薔薇　塵
古生姜疑り深き眼をしたる　芳賀　陽子
火がいつか灯となり秋思深まれり　日置　正次
深酒につき合う覚悟つづれさせ　保里よし枝
揺り椅子に本伏せてあり敬老日　馬来まち子
残る虫うつらうつらと「深夜便」　山口　愛子
自由など深山の茸の傘の下　吉田　和男
休暇果つ画布に描かれし点と線　堀口みゆき

第１０５回　11月１日（金）

藁塚に小人の踊る日暮かな　青木　敏行
国選の投票済みて冬の庭　青柳　白芳
ピタゴラスの胡桃からから当てずっぽう　安藤久美子
山茶花を窟の布袋が指さしぬ　荻野　樹美
名月や待ちかねていた平和賞　金栗トモ子
秋澄むや盲導犬の眼裏に　佐々木重満
冬涛ノタテガミ走ル　詩ノ一片　塵
蛇は穴にＭＲＩに人入りぬ　田畑ヒロ子
鬼の子や深刻化する人ぎらい　芳賀　陽子
紅葉鍋季節は急に走り出す　日置　正次
木の葉舞う宙の歪みに逆走し　保里よし枝
上履きへ夫の伝言もずの声　馬来まち子
秋の蚊の音もなく来てつきまとふ　山口　愛子
途中からずるずると走り蕎麦　山下　遊児
芋の露何事もなき検診日　吉田　和男
走り根に百の魂秋のこゑ　堀口みゆき

◎連絡先　堀口みゆき
miyuhoriguchi@yahoo.co.jp
電話　０９０　３９１４　０５６８

インターネット句会　宮永　武彦　報

八月

八月の腸（はらわた）で聴く読経かな　石鎚　優
片蔭に先客の猫のうのうと　吉村　元明
迎え火に空気の質の変わりけり　須藤　節子
秋空に真（まこと）の青を教へられ　多久島重宏
パスカルの空しき喩へ蘆を刈る　菅原　若水
縦横に影奪い合う火取り虫　麻生　明
原爆忌世には戦火とパリ五輪　瀬古　修治
八月の画布一枚を塗り替える　町野　敦子
川の字の吾子の寝息や夏の星　近藤由美子
夏休み夜空は星を遊ばせて　江原　文
大揺れの日本列島心太　佐々木重満
秋なすび焼いて冷やして来ぬ人を　渡辺　順子
送り火や出航のドラ響きおり　桐山　芽ぐ
百日草さわればかさと風になる　平田　薫
八月や曳航されて転覆す　金栗トモ子
老いるとは時にかなしい鯊の顔　光田久美子
「ボノドリ」とお国訛りで盆ダンス　六　川
旱星死が貼り付いている背中　石川　夏山
歳時記の汗じみ栞、遺品本　蓮田　宿仮
墓石の触れれば熱き終戦日　宮永　武彦

九月

空一枚線路一本盆帰省　江原　文
炊き立ての御飯に卵今朝の秋　瀬古　修治
螻蛄鳴くや尖りしころの親不孝　麻生　明
坊さまの一団がくる曼殊沙華　平田　薫
不条理につくつく法師もつと鳴け　菅原　若水
鳥渡る一朶の雲に千々の恋　多久島重宏
空泪流す女の秋思かな　金栗トモ子

ヒト科に領空あり蜻蛉は自由なり　佐々木重満
難問の数読解くや宵涼し　吉村　元明
暗渠かな川の匂いの夕間暮　石川　夏山
姉妹小さき嫉妬酔芙蓉　光田久美子
残暑なおデフォルメされし我が肢体　町野　敦子
みみず跳ねて命いのちと言ふてをる　石鎚　優
熟慮せず鶺鴒すでに速走り　須藤　節子
秋蝉の木漏れ日のなか本を伏せ　蓮田　宿仮
モンゴルの五十度の酒後の月　桐山　芽ぐ
水巡る星まだ龍淵に潜む　六　川
コロッケや母の心の形して　宮永　武彦

十月

銀杏散る解けぬパズルを解くように　江原　文
伊豆半島釣瓶落しを引き受ける　麻生　明
鬱の字の迷路にはまり愁思かな　金栗トモ子
人はみな深き闇もちちちろ鳴く　菅原　若水
そよ風とパントマイムか子蟷螂　吉村　元明
咲くときの散ることおもう金木犀　平田　薫
背番号縫い付けし日の夜長かな　町野　敦子
かなかなの八十路の峠ひとり旅　柳　蒼柳
木の実落つアフリカ知らぬキリンの夢　石川　夏山
藷を掘るひもじさ知らぬ子供達　佐々木重満
金婚の一人祝杯菊の酒　須藤　節子
もう知己の居ないふるさと柿たわわ　渡辺　順子
昔来たこのレストラン小鳥来る　桐山　芽ぐ
夢現良い子寝かせぬスーパームーン　多久島重宏
良きことの予感のありし梨をむく　瀬古　修治
蜘蛛の巣に匂ひ果てたり金木犀　蓮田　宿仮
金婚の林檎ふたつの帰り道　宮永　武彦

◎投句、選句、選評すべてインターネット上で行っています。毎月第三月曜日投句〆切
◎どなたでも。参加者募集中。登録・参加は無料。（初回参加はアカウント作成が必要ですので、お問合せください）
◎連絡先　宮永武彦　takehikom0410@gmail.com

磯子凪句会

尾澤　慧璃　報

於横浜市社会教育コーナー
令和6年9月25日

九月

山古志の牛の角突き秋の天　長濱　藤樹
熊よけの音かしましや紅葉山　辻内美枝子
石ころに影できてゐる月夜かな　鹿又　英一
秋晴や雲一片を阿夫利山　六　川
山間の守宮鳴く宿星月夜　藤田　ゆい
一篇の詩を置いてゆく秋の蝶　大崎　恵実
店裏の佇む紫煙秋の虫　瀬崎　良介
秋日傘見知らぬ妻とすれ違ふ　佐藤　久
蕎麦殻を足したる枕秋の風　池田恵美子
山荘の窓全開やけふの月　川野ちくさ
山裾の散らばる灯り秋の声　尾澤　慧璃

令和6年11月27日

十一月

檜皮葺の玉砂利の鳴る神有月　六　川
セーターの皮の肘当インクの香　藤田　ゆい
柿の実と牡蠣のビネガー祝ひ酒　瀬崎　良介
敷き皮に熊の手と足火恋し　尾澤　慧璃
面の皮厚き女の黒ブーツ　池田恵美子
爪皮の下駄のつまづく散紅葉　川野ちくさ
冬ざれやイミテーションの皮財布　村上　裕也
ぶつかけるイカリソースや牡蠣フライ　鹿又　英一
神の留守樹皮に残りし傘マーク　藤田　裕哉
枯木立緋色のシューズ走りけり　辻内美枝子

◎会　場　横浜市社会教育コーナー研修室C
（JR磯子駅より徒歩4分）
◎日　時　奇数月の第4水曜日　13時～
◎連絡先　尾澤慧璃　kinglovestea@gmail.com

金八句会

杉　美春　報

九月

恐竜の背を滑る児ら秋夕焼　扇　義人
青春切符背高泡立草の中　栗林　浩
かなかなや雨後の雲間の薄日差　尾澤　慧璃
鬼灯や水ぬるぬると不眠症　里見　美季
つづれさせはてな付箋の色の意味　松浦　泰子
秋空に大き半円槍を投ぐ　村上　裕也
秋暑し道行く人の口ゆがみ　杉　美春
秋声や小鼻にひとつぶのピアス　中村　光男
エッセイのさらりと書けて涼新　佐藤　久
秋暑し河馬の前頭葉痩せて　神谷　純子
鶏頭や負けず嫌いの赤もゆる　石鎚　優
わが子よと空蟬を抱く漢かな

十月

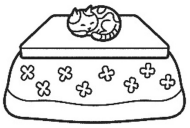
お土産に餡ぱん二つ菊日和　佐藤　久
テディベアのぽつんと座る秋の暮　中村　光男
耳鳴りの虫なく声に紛れたり　神谷　純子
曼珠沙華身体の芯にある火照り　杉　美春
フラミンゴの脚脚脚や冬が来る　栗林　浩
タクシーのするりと魚になる良夜　なつはづき
白芙蓉かをるや花芯のうすみどり　石鎚　優
秋の雲パズルピースの欠片あり　里見　美季
晴天の黄葉映えたる銀杏かな　村上　裕也

十一月

世界地図の真中にゐて鰯割く　栗林　浩
被災の地すべてに耐えて山眠る　神谷　純子
八十路行く母の慕情や石蕗の花　石鎚　優
まつ黒な梁の太々神無月　松浦　泰子
靴紐の微かな緩み芒散る　尾澤　慧璃
モザイクの紅葉映える乱視かな　村上　裕也
ガンダムの消えし埠頭や冬かもめ　佐藤　久
もう来ることも無き山峡や夕紅葉　中村　光男
小春日や人形の顔拭いてやる　なつはづき
壺という壺は口開け冬支度　里見　美季
割れ残るステンドグラス神の留守　杉　美春

◎毎月第二金曜日　夜八時より。ZOOM使用。
第二水曜日　出句締切、事前投句
◎連絡先　杉美春　miharusugi@jcom.home.ne.jp

冬の一句



うなだるる馬の背骨や霜の華　猪狩　鳳保
夕暮れにひと色足りぬ白障子　町野　敦子
枯蟷螂追われ追われてデイサービス　大山　賢太
柚子湯して木星の月見たくなる　安藤　靖
冬コスモス植ゑれば耳元に羽音　内田ゆり子
灯油売りの曲は変らず初時雨　横川はっこう
風に舞い水に遊んで木の葉かな　宮永　武彦
にんげんてふ小動物や冬夕焼　石鎚　優
寒満月抱きしめている平和賞　金栗トモ子

新連載　吟行しようよ！（第一回）

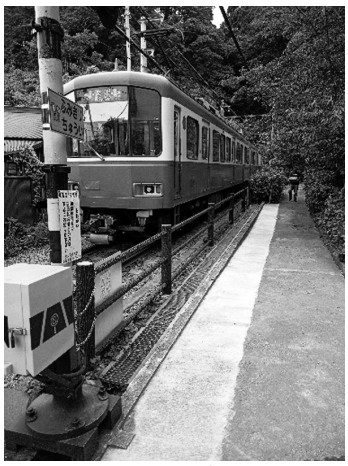
「やっぱり鎌倉」

藤田　裕哉　記

知っているようで知らない地元ですが、吟行お薦めの鉄板は、やっぱり「鎌倉」。インバウンドで大混雑の若宮大路・小町通りや、鎌倉大仏、江ノ島などは避け、ゆったり江ノ電でいく鎌倉はいかがですか？歴史遺産と句材がてんこ盛りです。

まず、鎌倉ではなく比較的空いている藤沢から、一日乗り放題の「のりおりくん」を購入して出発がお薦め。江ノ島を横目に、商店街の中を江ノ電が大きくカーブして通過する腰越で下車。近くには義経腰越状で有名な満福寺があります。さらに海沿いを進むと、スラムダンクの舞台の鎌倉高校前、サザンの歌で有名な稲村ケ崎。ひなびた江ノ電の駅からぶらぶら歩くといろいろ発見があります。小生のお薦めは次の「極楽寺」。小さな駅を出て、坂を上ると立派な山門、境内には四季の草花や古木も。極楽寺から東へ、切通を歩いていくと、途中に江ノ電を跨いでお参りする御霊神社、さらに行くと長谷寺。小高い境内からの材木座海岸の眺めは最高。最寄りの長谷駅に隣接して、シラス丼の美味しい店もあります。江ノ電のガタゴトを聞きながら、地ビールをお供にいかがですか？

と、ここまで書いたところで、もう枠一杯です。続きは、皆さんが散策して見つけてください。



江ノ電

極楽寺

丹沢句会吟行報告

長谷川昭放　記

日　時　令和六年十月十八日（金）
吟行地　神奈川県立秦野戸川公園
句会場　県立山岳スポーツセンター
講　演
「航空機と整備のしくみ」
元日本航空整備士　松浦陵保氏
「鳥の目、虫の目、C／Aの目」
元ＪＡＬキャビンアテンダント安藤美酒々氏

当日は朝から雨が降ったり止んだりの生憎の天気であった。が……「俳人に生憎はない」の名言に励まされ総勢33名の参加者は、句材を求め思い思いの場所に散った。

戸川公園のランドマークは高さ三五ｍ、長さ二六七ｍの風の吊橋だ。眼下に水無川、晴れていれば秦野盆地が一望できる。西岸にはビジターセンター、橋を渡れば直下に「おおすみ山居」と庭園。句会場までの道すがらには自然の草木が豊かであり、ボルダリング等の施設も見学できた。

句会は芳賀陽子会長、佐藤久事務局長、清水呑舟県俳連会長の挨拶を戴きスタート。講演は今までに無い異色の内容であり、参加者の耳目は釘付けとなった。

ＪＡＬの社内にはＯＢを含め約50名の句会があるとの話にも驚き、質疑応答が活発に行われた。

その後、清記用紙が配られ会は一気にクライマックスに突入。披講は菅沼とき子、竹村半掃、選評は講師のお二人、来賓三人、副会長内藤ちよみ氏、名誉会長の尾崎竹詩氏であった。続いて成績発表と表彰が行われた。

一位から十五位までの入賞句と作者

丹沢の風折りたたむ　秋の蝶　　與　起
身に入むや山より雲が降りて来る　　岩田　信
吊り橋はまさに鳥の目秋時雨　　安藤美酒々
秋深し雨の匂いのログハウス　　宮永　武彦
木には木の野には野の声秋ついり　　清水　呑舟
丹沢の秋風捕らへ女郎蜘蛛　　佐藤　　久
秋の吊り橋渡ればみんな詩人めく　　芳賀　陽子
少年の暴走に似て泡立草　　田畑ヒロ子
秋雨や風の吊り橋重たそう　　加藤　三眠
風神の守る吊橋小鳥来る　　内藤ちよみ
丹沢のしじまを裂きて鹿おどし　　関根　洋子
つくばいの色鳥コツンと去りにけり　　酒井　天敏
丹沢の金風ここにとどまれり　　松浦　陵保
丹沢山鵙の言い訳け聞こうじゃないか　　北村　文江
群落となつてしまいひし背高泡立草　　菅沼とき子

入賞おめでとうございました。

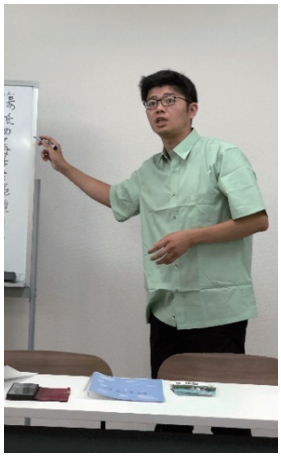
上：安藤美酒々氏　講演

下：松浦陵保氏　講演

風の吊橋

全句講評講座報告　　なつはづき

令和六年九月十五日（日）、全句講評講座が行われた。会場はかながわ県民センター、事前投句二句、講師は神奈川県在住の黒岩徳将氏である。黒岩氏は本部の青年部長であり、斉藤三鬼賞の選考委員、ＮＨＫ俳句に出演中の若手有望俳人である。神奈川では過去にも全句講評講座を行っているが、今回初めて参加した人も多く喜ばしい限りである。限られた時間の中、熱を帯びつつ理路整然とよどみない口調で一句一句に向き合っている黒岩氏の姿が印象的で、刺激的で有意義な一日となった。



黒岩徳将氏

祝　おめでとうございます！
第１２４回南日本俳句大会　奨励賞
墓石の触れれば熱き終戦日　　宮永　武彦

＝地区動向・消息＝

1. 10月18日（金）丹沢句会吟行会33名参加
秦野戸川公園／山岳スポーツセンター
2. 11月23日（土）
令和六年度神奈川県現代俳句協会俳句大会
かながわ県民センター　86名参加
3. 12月6日（金）湘南サンシャイン句会吟行会
53名参加　大船フラワーセンター・大船観音他／鎌倉芸術館
4. 12月9日（月）副会長会議・三役顧問会議
今年度の事業報告、次年度活動計画、組織案
5. 新会員紹介《正会員》
向日　葵（厚木市）　未開くるす（横浜市）
足立和子（秦野市）　伊藤キララ（横浜市）
6. 逝去謹悼
岡田良子（藤沢市）　11月

《編集後記》

○令和６年度俳句大会も盛況のうちに終了しました。事前投句と当日一句句会の入選句を掲載しました。入賞者の皆様、おめでとうございます。
○会報１６７号では、「春の一句」を募集します。編集人までご投句ください。２月20日締切です。
○どうぞ皆様、良いお年をお迎えください。

発行所　神奈川県現代俳句協会
発行人　芳賀　陽子
編集人　杉　　美春
〒２５２・０３２５
相模原市南区新磯野４-４-１-５０６
電話　０９０・６５３４・１４５２
Eメール　miharusugi@jcom.home.ne.jp
事務局　佐藤　　久
電話　０９０・６５８７・０１１３
Eメール　hisashi36@fj9.so-net.ne.jp
印刷所　㈲湘南グッド